

令和 8(2026)年度

法学部

学校推薦型選抜(公募制)

入学試験問題

英語 9:30～10:30 (60 分)

論述 10:45～11:45 (60 分)

以下の文章は、瀧川裕英の論考「くじ引き投票制の可能性」の一部を抜粋したものです¹。これを読んだ上で、その先に続く設問に解答してください。

くじ引き投票制を本格的に提案したのは、イエール大学の憲法学者アキル・リード・アマーである。そこで、まずはアマーが提示する制度の概要を簡潔に見ておこう。

アマーは「くじ引き投票制 (lottery voting)」を多数決と対比する。多数決では、投票の多数を獲得した候補者が選出される。これに対して、くじ引き投票制では、投じられた票からくじ引きによって選出される。具体的には、投票を集めた投票箱から、ランダムに一枚の票を引き、その表に名前のあった候補者が当選となる。たとえば、〔候補者〕A が六十%、〔候補者〕B が四十%の票を獲得したとき、多数決ではA が必ず当選する。これに対して、くじ引き投票制ではA が当選する確率は六十%である。

アマーがくじ引き投票制を提案するとき、その背景にあるのは、「分断され孤立したマイノリティ (discrete and insular minorities)」の問題である。米国におけるその典型例は、黒人である。分断され孤立したマイノリティは、多数決による集合的意思決定を繰り返しても、常に負け続け、意見が反映されない。このような少数派の取り扱いは、民主的決定の正統性に対して難しい問題を突きつける^①。

この問題に対処するために、司法審査（立法府における多数派の決定を裁判所で審査する）や同化的統合（分断され孤立したマイノリティを主流派社会へと統合する）という解決策が提案されてきた。だが、いずれの解決策も問題を抱えている。そこで、有望な解決策としてアマーが提案するのが、くじ引き投票制である。多数決では、少数派の意見が採用される可能性はゼロである。これに対して、くじ引き投票制では、少数派の意見が採用される可能性は、多数派の意見が採用される可能性よりは低い、ゼロではない。

問1：下線部①に関して、ここで筆者が念頭においている、民主的決定の正統性に対して突きつけられる「難しい問題」に当てはまると思われる問題を一つ示し、どんな問題なのか、またなぜ当てはまるのかを説明してください。（解答用紙 10 行以内）

問2：実際に「くじ引き投票制」を運用した際に発生すると思われる問題点を一つ指摘し、どんな問題なのか説明してください。（解答用紙 10 行以内）

問3：多数決とくじ引き投票制を比較して、民主的な議会の選挙制度として見た場合にどちらがより望ましいか、自分の見解を述べてください。（解答用紙 10 行以内）

以上

¹ 瀧川裕英（編著）『くじ引きしませんか？——デモクラシーからサバイバルまで』信山社 2022: 109-167 頁。引用箇所は 113-114 頁。引用にあたって文献参照表記や行間を省略するとともに、〔 〕を用いた語句の挿入によって文意を補っている。

令和 8(2026)年度 学習院大学 学校推薦型選抜(公募制)

※太線わく内は必ず記入してください。

志望学部	法学部	志望学科	政治学科	受験番号		氏名	カナ 漢字	
試験科目	論述			備考		採点欄		

5

10

15

20

25

30